58

モリソンの伝統医療観

郭　秀梅
順天堂大学医学部医史学研究室／北里大学東洋医学総合研究所医史学研究部

かつて北京にはモリソンストリート（現王府井大街）があった．いま東京の東洋文庫にはモリソン文庫があり，しかも東洋文庫はモリソン蔵書の購入を契機に設立された．これらはロンドン・タイムズ紙の北京特派員記者，ジョージ・アーネスト・モリソン George Ernest Morrison にちなんで名付けられたものである．

モリソン（1862～1920）はオーストラリア人で，探検家・旅行者・記者として知られているが，本来は医師だった．1887年にエディンバラ大学医学部を卒業し，「内科と外科の知識は広範かつ正確で，多大な能力をもつ」と試験官に評された．1895年には「各種奇形および異常の遺伝」の論文により，同大学から博士号を取得した．1897年にロンドン・タイムズ紙の特派員として北京に派遣され，以来20年以上も中国の政治などにさまざまな関わりを持ち，1912年には中華民国初代総統・袁世凱の政治顧問を務めている．1920年5月30日，英国デブォン州シドマスにて妻と三人の息子を残し，膵臓炎により死去した．

モリソンは医師としてオーストラリアのバララット市立病院につとめ，スペイン鉱山病院に勤務し，船医になったこともある．どちらかというと，医師になったのは生活のためだったらしい．医師か記者かと迷った結果，記者を選択して医療から離れ，著名な記者として一生を終えた．

モリソンは完全な西洋医学の教育を受け，臨床でもその医学知識を用いて治療を行ったが，内面には別な医療観を持っていた．とりわけ自分の病気については，他医の診断に対して疑問を抱き，時には伝統的方法で治療していた．するとアジアおよび中国医学の影響を受けたではないかと考えられる．1896年，中国昆明で腺ペストに感染して重体となったが，薬はなく，他医もいなかった．そこで彼は大汗をかいて病気を追い出すことを考え，中国人の家でオンドルに大きな火をおこし，皮膚が焼けただれるまで熱いレンガの上に横たわっていた．モリソンは「これはおそらく私が行った治療のなかでもっとも原始的なものだったと思う」という．晩年，膵臓炎の治療のため，英国医師の勧めで豚の生膵臓を食べることを試みたが，残念ながら効果は見えなかった．

特筆すべきはモリソンが按摩を非常に好み，中国の駐在期間に男性マッサージ師をしばしば自宅に招いていた．イギリスでの療養時期にもアーサー・ロバートソンがマッサージ師を担当していた．しかしロンドンにはオーストリアでマッサージに使うジュゴン油がなくて困る，などと彼は日記に記していた．彼はつねにマッサージ師を付き添わせていたことが推測できる．

袁世凱の体調不良時には按摩治療が必要と医学的助言をした．「腕のいい按摩師から毎日半時間治療を受ければ，身体的健康が格段に向上し，何年も若返る．つま先から頭てっぺんまで按摩をうけ，こうした治療は半時間で二時間分の運動に匹敵する効果がある．私は医師として，強く勧める」「治療には計り知れない効果がある．血の巡りがよくなり，全体の気分が驚くほど違ってくる」という．そして日本人の按摩師の名刺を渡し，料金は一時間一ドルと推薦した．モリソンがマッサージの効果を深く信じていたのは，自らの体調改善にかなり役立ったからだろう．

近年，中国ではモリソン研究のムードが起こり，さまざまな著述が出版されている．さらに2014年～2016年，中国中央テレビ局はドキュメンタリー番組「モリソンと清末民国初の中国」を制作・放映し，彼の史実がよみがえりつつある．